



日用百科の使われかた 小口の手沢相は語る

人文科学研究所教授 横山俊夫

「昔の日用百科」と呼べる書物は貴重な歴史資料である。多くの人びとがそれを使って暮らしたと思われるからである。しかし、その使われかたの実際については、日本でも外国でも研究が進んでいない。

いつどのような内容のものが刊行されたかはわかって、それが誰に購われ、どこが読まれたかということになると、歴史家の口は重い。もちろん故人の日記から断片的にわかることはある。しかしそれらの書物のはたらきの全貌は茫漠としている。研究の遅れの理由は、端的には、これまでの出版史研究が書物を作る側に重点をおいてきたことにある。

じつは、日本の工業化以前の社会、とりわけ17世紀末から19世紀半ばにかけての比較的安定した時代の生活文化の大枠を考える場合には、看過せえない二種の日用百科書がある。それは「節用集」と「大雑書」である。前者は和語をいじるは順と門部別にならべた漢字変換辞書として15世紀半ばに登場。17世紀後半に町や在の役持ち層が公用文を多く綴るようになると需要が増し、それに応じて、地図や王代一覧、礼法や芸道の指南、料理献立や薬方の記事ものるにいたる。大雑書はおもに日柄や方選びの書。「雑書」と称された12世紀末の暦占書や、14世紀はじめに形をなした『篋篋内伝』や『拾芥抄』などの記述をとりこんで、17世紀初期に『大ざつしよ』として成立。やがて、明末流行の命占書「三世

相」や養生知識もとりこむようになる。

この二種の書物は、あわせて使われた場合も多く、18世紀を通じて、大雑書のなかの人気項目、たとえば



五行説にもとづく男女相性占いや星の運行に応じた吉日選びなどは、少しづつ節用集の付録に加えられてゆく。19世紀前半の最盛期の節用集といえば、総丁数四百以上、その巻末には大雑書も縮約掲載され、いわば、俗世の外との通交も手引していた。もちろん節用集の中核は和漢辞書。紙幅の約四分の三を占めて、書札にかなう、あるいは「雅」なる漢字作文を助け、巻頭部分には世上百般の知識や礼法をかかげた。

このような厚冊本節用集は、いわば書き言葉の礼を中心に、天地人のかかわりのなかでの人の作法、civility を説いた総合礼法書であった。これらがどのように使われたのかという問題は、したがって、かつての日本にみられたある種の文明を考える鍵ではないだろうか。1850年代に訪日した英国使節らは、当時のどの国も礼法が社会の一部に極在するが日本は異なるとして、その「civilisation」の質を高評したが、そのような議論とも呼応する何かが見えてくるかもしれ

ない。

厚冊本節用集のなかでも、とくに広範囲に用いられたのは『永代節用無尽蔵』であった。天保二年(1831)から文久四年(1864)まで、概ね同じ構成で3版を重ねた。1980年以来、私が折にふれて各地で見る機会があったこの残存本60数点のうち、その使われかたの思い出を語りうる高齢者に会えたのは残念ながらわずかの機会だけ

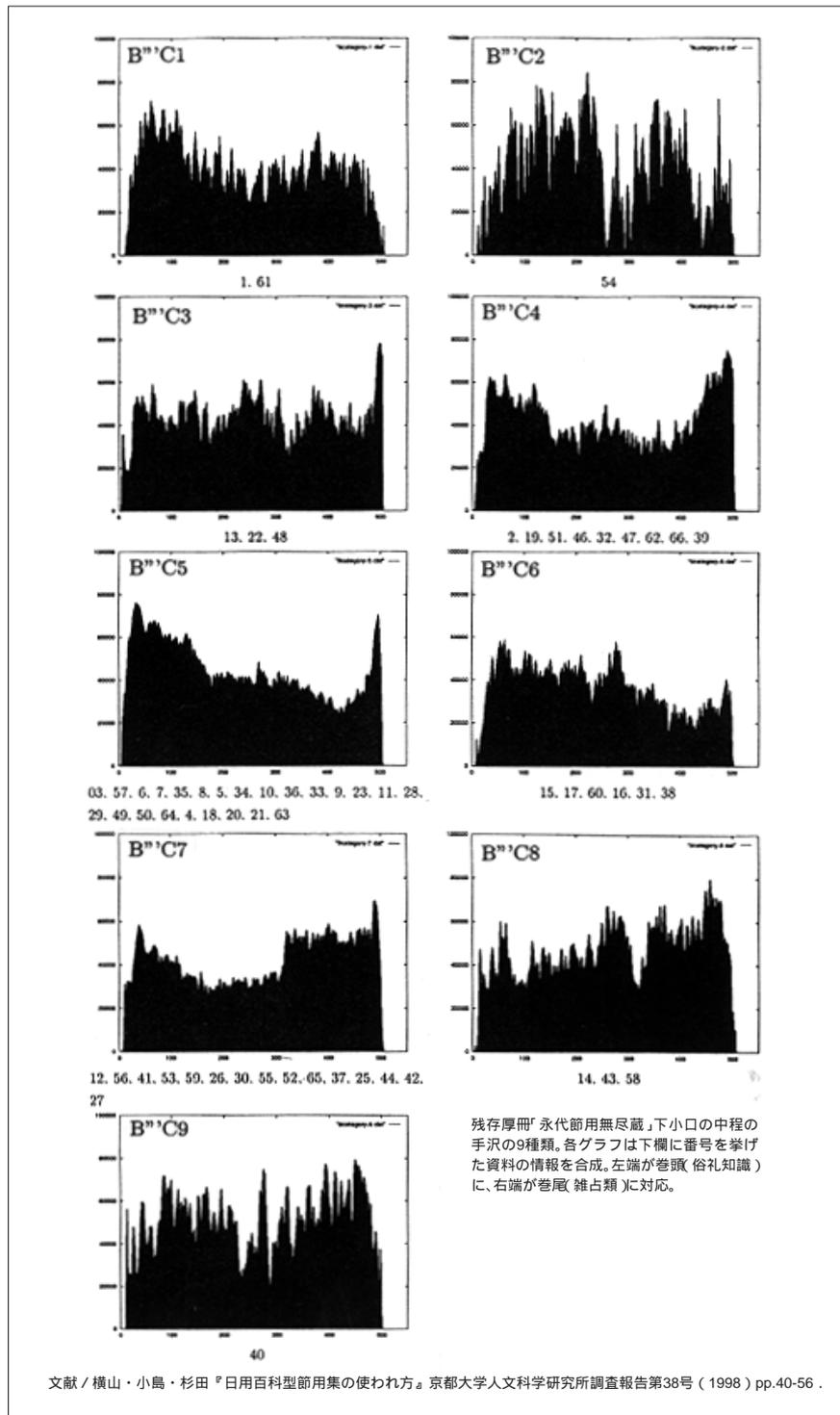
であった。「じいさんだけが見ていて他の者にはさわらせなんだ」、「町内でこれを持っていたのはウチともう一軒だけやったナ」、「祖父は村中の子供の名前をこれを使ってつけてました」などと。

しかし、語られる過去は限られている。それに古いものを大切にす家でしか聞けないという偏りもある。しだいに私は、話よりも書物そ

のものに再び向きあうようになった。「ウチの宗派は神さんが嫌い、まじないやお札というものはご縁がうて」と聞かされても、その家の節用集の「まじなひ調法記」の欄が摩耗していることもある。

こうなると、調査は『国書総目録』にあがっているような、旧蔵者の手をはなれた諸冊も調べたくなる。やがて、各冊の使われかたを簡明にとらえる方法を思いついた。下小口の中ほどから背にかけて出る手ずれの跡の縞模様である。そこは求める丁が繰り出されるときには使用者の手が触れず、開かれて読まれているときだけ触れ、そのつどかすかに紙の下端が摩耗する。しかも他の丁の同じ位置に手は触れない。二世以上にわたる使用で、この部分に茶褐色の筋紋が濃淡さまざまに出てくる。濃いところは、よく読まれた丁である。小口の「手沢相」は雄弁ではないか、と。

はじめは、それをスケッチし、特徴を書き留めるだけであった



が、多くの事例を比較したり、共通の傾向を見ようとするれば、一定条件下での精密な撮影と、それをスキャナーにかけて濃淡の分布を数理的にとらえなくてはということになり、国立民族学博物館の杉田繁治氏、電力中央研究所の小島三弘氏ほかの方がたの協力を得ること10年。件の小口部分の映像を0から255までの濃度をもつ微小点群に転換し、それらを丁の配列に対応させた数百の線上に数量として集積して棒グラフに表示し、資料ごとにできるそのグラフの上端の凹凸の形状の互いの「距離」を相関係数を求めて類別するという方法におちつき、ようやく昨年、『永代節用無尽蔵』64点の使われかたの類型分析を本学人文科学研究所の調査報告に公表した。

そこでは、情報圧縮上の無理が少ないという理由で浮上した9範疇分類に注目してみた。そのうちのひとつが数の上で他をしのいだ。手沢では、和歌や謡曲に執心で辞書を頻繁に使用し、

五行占いにもこだわり、古今の雅びをしたう気配も濃厚。それが京都上京下京、宇治、丹波善王寺、近江八幡、金沢、仙台、和歌山で使われていたものの中にあり、旧蔵者の家業も、宮廷や城勤め、奥医師、漢学者、呉服屋、量表問屋、飛脚業などとさまざまであった。18世紀前半に西川如軒が、日本では庶民が高位の公家武家のまねをしたがると呆れていたが、その傾向、kugefication（筆者造語）を物語るようなデータが出たともいえる。

ただし、デジタル化による画像処理は、ナマ資料の抽象化の積み重ねにほかならない。とりあえずの分類範疇はモデルではありえても「実態」そのものではない。それでも、地域や職種や階層に「特有」な暮らしむきがあるはずだとのこれまでの思い込みがほぐれ、自由な発想をうながされる楽しみがわいてくる。

（よこやま としお）

附属図書館100周年

「『静脩』総目次」を読む

附属図書館情報サービス課雑誌・特殊資料掛 松田 博

『総目次』には「資料紹介」の目次欄がある。京都大学が所蔵する資料について、もちろんすべてではないが、紹介・解説のあったものを別立て目次にしたものである。京都大学所蔵の参考図書や特殊文庫にはどのようなものがあるかが通覧でき、内容が知りたいと思えば解説等本文に早速いきつくという、たいへん有効で便利な目次であるといえる。

この「資料紹介」の目次を読むと、2回以上解説が付された特殊文庫で、しかも比較的長文の解説のあるものを絞ってみると以外に少ないことに気が付く。それには相当の理由があったのであろうが、ひとまずここではこうした条件にかなうものとして「上野文庫」・「旭江文庫」・「舎密局・三高資料」の3つがあることを指摘しておく。

経済学部の所蔵にかかる「上野文庫」は、朝日新聞社元社主上野精一の旧蔵書で、ジャーナリズム史関係をはじめ政治史、社会史、思想史

関係資料など27,000冊におよぶコレクションである。1955年から40年間寄贈され続けたが、その寄贈期間の長さにおいても上野文庫に匹敵するものは全くない。上野文庫が京都大学に寄贈されるに至る経緯やその内容については、『上野文庫目録』中の「上野文庫由来記」や「上野文庫概観」に詳しい。また、『静脩』誌上での紹介・解説もダントツの4回以上を数え、解説内容も長文に類する。いずれの解説も文庫のなかの個別資料、あるいは特定主題にそった資料群に焦点を当てたものだが、文庫内容の質量共の豊かさと旧蔵者上野精一の見識の高さを語る内容となっている。それだけに今後も上野文庫についての紹介はあると思うが、ここでは文庫の1点であるアーネスト・サトウ旧蔵本についてふれておきたい。

「上野文庫1冊のインキュナビュラについて」（1）に次のような表現が見られる。“ところで、どのような経緯でこのインキュナビュラが

上野文庫に架蔵されることになったのか。本書だけでなく、同目録の「宗教史」の項には17世紀までの出版物が数十点集中している。とくに多いのは16世紀から17世紀にかけての『日本イエズス会年報』の類である。この疑問は、・・・”という内容である。高橋俊哉はこの自ら抱いた疑問に対し、“単に新聞の一形態としての見本のつもり”という上野精一自身のことばを引用しながら、インキュナブラをはじめ『日本イエズス会年報』等これら資料が新聞の見本として架蔵されたと結論づけている。“見本のつもり”で購入された資料が総計100点を超えるという事実は、それ自体おどろくべきことだが、むしろこのことは経営者としての姿以上に、研究者としての上野精一の姿を大きく浮かび上がらせるものとなっている。とまれ、この資料群の中の1点にアーネスト・サトウの旧蔵書が見られることである。それは、『A' true description of the Mighty Kingdoms of Japan and Siam. Written originally in Dutch by Francis Caron and Joost Schorten. [sic] And now rendred into English by Capt. Roger Manley. London, S.Broun, 1663.』と題されるもので、同じ1663年にニュールンベルグで刊行された“Wahrhaftige Beschreibungen zweyer mächtigen Königreiche, Jappan und Siam.”の英訳版である。『日本・シャム王国実記』と称されるこの書は、カロンの『日本大王国誌』1661年版を底本に、スホーテンの『シャム王国記事』を加えたもので、「J.Laures『Kirishitan Bunko 吉利支丹文庫』1957」によれば、京大以外に東洋文庫、天理図書館等にその所蔵が確認されるものである。カロンの『日本大王国誌』について一言すると、これが初めて公にされたのは“Begin ende Voortgangh, Van de Vereenighde nederlantsche Geoctroyeerde Ost-Indische Compagnie. ... 1645.”においてであり、また単冊としては1648年にアムステルダムで刊行されている。「上野文庫」には1649年にアムステルダムで刊行された版本が所蔵されている。この『日本・シャム王国実記』英訳版は、サトウ自身が入手した時点ですでに重複購入であったことが『Bibliographischer Alt-Japan-Katalog』No.288から推量されるものである。

「日本イエズス会」関係のものとして『The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610. Privately printed, 1888』を著しているアーネスト・サトウが、その蔵書を含め日本文献に通じ

ていたことはつとに有名である。また、京都大学附属図書館との関わりについて云えば、新村出館長時代の1914（大正3）年5月にアーネスト・サトウ旧蔵書『日本イエズス会年報』122点が購入されていることである。リストは『Bibliographischer Alt-Japan-Katalog, 1542-1853. Kyoto, Deuches Forschungsinstitut, 1940』に収録・掲載され、概略が『京都大学附属図書館60年史』に紹介されているところから、その内容については容易にうかがい知ることができる。

先のサトウの手許で重複していた旧蔵書は、いずれかの時期に売り払われ、書店を通じ上野精一の入手するところとなり、上野文庫の1点として経済学部に入り、京都大学所蔵アーネスト・サトウ旧蔵書を1部ふやすことになったものである。奇しき縁といえよう。

次の「旭江文庫」は、新村出、厨川白村、浜田青陵等と当時親交のあった大賀寿吉が、武田製薬に勤めるかたわら“絶大な情熱と努力”をもって収集したダンテの作品600点をはじめとするコレクションである。コレクションの内容は、「附属図書館の逸品『旭江文庫』」（2）にみられるように、“同文庫は1502年から1936年までに刊行されたダンテの著作の原典・原典の各国語訳書・研究書・学術書を含む三千点からなり、量的にも質的にも日本随一の蒐書である。文庫中の圧巻は何と云っても、『神曲』である。写本・揺籃期本は集められていないものの、1502年のアルド版、1512年ランディーノ注解のスタニーノ版をはじめとする千五百年代の主要な刊本が見事にそろっている。その他の世紀の刊本も重要なものは漏れなく集められており、総数約百八十点にのぼる。『神曲』以外の著作についてもその充実ぶりは大同小異である。...したがってダンテ研究に携わるものにとっては、かけがえのない貴重な宝庫にほかならない。”との評価に尽くされるものである。一部が購入され、大部分が1939年7月、故人の遺志により京都大学に寄贈された。大賀寿吉その人、あるいはコレクションについては、「『旭江文庫』の生みの親大賀寿吉氏のこと」（3）や「詩聖ダンテに魅せられた明治人のコレクション：旭江文庫」（4）詳しい。

ところで、「詩聖ダンテに魅せられた明治人のコレクション」中には、“大賀寿吉とそのエクス・リプリス”と説明のついた写真が掲載され、“またこの文庫にふさわしい中世ヨーロッパ風の優雅なエクス・リプリスが添えられて大

賀さんの風格がしのばれるような気がする。”という表現が見られる。この蔵書票、菱形模様の中に花びらを埋め込んだようなデザインなのだが、この作者等については他の機会をみてもふれられていない。思うに、あまり一般的にはなっていないようなので、この蔵書票の作者及び由来について次に紹介しておきたい。

「蔵書票」(5)と題する書物随想中に“ 近く再び日本へ来るはずの英国の陶工パーナード・リーチが、むかしその友柳宗悦氏のために作った藤の蔵書票、その柳氏がダンテ文献の蒐集者として著名な大賀寿吉翁のために意匠した蔵書票なども美しいものであった。”との表現があるところから、作者は柳宗悦であることが看取される。同じく「柳宗悦と本」(6)と題する随想中には“ 亡友柳宗悦が、仲のよかった民間のダンテ学者大賀寿吉のために作った珍しい蔵書票 ”とのくだりがあり、掲載された蔵書票の図柄から、蔵書票の作者は紛れもなく柳宗悦であったことがわかる。これらの随想は、蔵書票について書かれた寿岳文章の一文であるが、前者は蔵書票への関心が必ずしも充分ではなかった1933年に公表され、後者はPR誌のしかも表紙うらを利用した図録にその説明を加えるというものであったから、ともにあまり注視されることなく今日にいたったのではないだろうか。いずれにしても、柳宗悦が友人大賀寿吉にふさわしい蔵書票を考案したであろうことをこれから読みとることができるのである。

そして、さらには、この蔵書票は以下に表現されるように柳宗悦自身の思想を反映したものであったこともうかがい知ることができるのである。“ この蔵書票は昭和3年ごろの作かと記憶する。当時、柳は美しさを産み出す母型とも言うべきものが存在すると考え、それを組み合わせれば、いくらでも美しい模様ができる

との理論を立て、しばしば私にも、目の前で描いて見せ、説明した。この蔵書票や昭和4年刊の自著『工芸の道』および私の『ブレイク書誌』の扉のデザインは、すべてその理論の実践である。しかし私はここで、模様そのものよりも、模様空間にはめこんだ柳のゴシック書体に一層留意したい。美しい本の生命が、書写または印刷される字体に宿るとは、当初から柳の強い信念であった。”と。総じて、これらからは柳宗悦、大賀寿吉、寿岳文章の間の真摯な交流や探求心がみとれるのである。

以上ふたつの文庫にかかわることを紹介しておきたい。

- 1 高橋俊哉「上野文庫1冊のインキュナビュラについて」『静情』Vol.16. No.2 (1979年12月)
- 2 岩倉具忠「附属図書館の逸品『旭江文庫』」『京大広報』No.425 京都大学広報委員会(1992年3月)
- 3 岩倉具忠「『旭江文庫』の生みの親大賀寿吉氏のこと」『静情』Vol.29. No.3 (1993年1月)
- 4 村橋ルチア「詩聖ダンテに魅せられた明治人のコレクション:旭江文庫」『静情』Vol.19.No.1 (1982年4月)
- 5 寿岳文章「蔵書票」『政界往来』第5巻2号(1933年11月)[寿岳文章『書物の道』書物展望社(1934年12月)、『寿岳文章書物論集成』沖積舎(1989年7月)に再録]
- 6 寿岳文章「柳宗悦と本 - 一枚の蔵書票を前にして - 」『ちくま』No.61筑摩書房(1974年5月)[寿岳文章『図説 本の歴史』日本エディターズスクール(1982年2月)に再録]

(まつだ ひろし)

イギリスの図書館ネットワーク： 英国図書館・イギリスの大学図書館訪問記 イギリスの大学図書館

附属図書館情報管理課受入掛 呑海 さおり

1. イギリスの大学

イギリスには現在約100の大学があり、バッキンガム大学以外はすべて国立大学です。これらの大学は歴史的に大きく3つに分けられます。

ひとつめは、中世に設立されたオックスフォードやケンブリッジのような伝統的の大学、ふたつめは、ロンドン大学などの19世紀に設立された大学、これらは、伝統的の大学の校舎が石材でできているのに対し、れんがでできていることが多かったため、'Red brick (赤れんが) university'と呼ばれることもあります。そして、第二次世界大戦後の新しい大学創設の波によって設立された大学です。これらは、'the new university'や、その校舎にガラスを多用していることから、'the plate glass (ガラス板) university'と呼ばれています。さらに1990年代の法改正により、専門学校にあたるポリテクニクも現在では大学の地位を得ています。

今回の海外派遣では、大小11の大学図書館を見学することができました。その中から、「伝統的の図書館」としてオックスフォード大学ボドリアン図書館、「赤れんがが大学」として、ロンドン大学インペリアル・カレッジの図書館について報告したいと思います。

2. イギリス政府の最優先政策

「教育、教育、そして教育」が、ブレア政権のスローガンです。将来の経済的成功を支える人材を育成することを目指し、子供達が学習を続けられる良い環境を保持することを、また、あらゆる階層のできるだけ多くの成人に、様々な方法による高等教育の機会を広げることを目的とした政策でもあります。ひとりひとりに教育の機会を広げることによって、社会的な機会の公平化が目指されているのです。

また、情報化時代への対応策としては、2002

年までに、すべての小中高校、専門学校、図書館、大学、博物館、ギャラリーを情報スーパーハイウェイにリンクさせる、'National Grid for Learning' (全国学習ネットワーク) が構築される予定です。

更に政府は2002年までに、生涯教育・高等教育で学ぶ学生数を50万人増やす計画をもっています。過去10年間をふりかえってみても、学生数は劇的に増加しており、現在フルタイムに換算して約150万人の学生が大学で学んでいます。特に、成人学生、パートタイム学生、通信教育学生は急増しており、18歳から22歳までのフルタイム学生の占める割合は、今や学生全体の半分であろうといわれています。アメリカ型の大衆的な高等教育に対して、長らくイギリスの大学は、「小人数エリート型」の高等教育システムであるといわれてきましたが、今大きく変貌を遂げつつあります。

また従来、イギリスでは学生の学費と生活費は、地方教育当局を通じて国費が充てられ、全額公費負担で賄われてきました。ところが、教育改革により、新たに導入された学生ローン制度に基づいて奨学金を受けた学生は、就職後にその返還が求められることになりました。このことにより、学生の「顧客意識」が高まったといえます。

これら学生の質的・量的変化に対応するために、イギリスの大学図書館もその変化を迫られています。

3. 伝統的の大学 - オックスブリッジ

数世紀にわたって、イングランドにはふたつの大学のみが存在していました。オックスフォード大学とケンブリッジ大学です。この二大学の創設は、12世紀に遡ることができます。

「大学の中に町がある」といわれているオックスフォードと、「町の中に大学がある」とい

われているケンブリッジは、共にロンドンから列車で約1時間半程の距離に位置します。この二大学には、オックスブリッジの象徴ともいえるカレッジ制度が残っており、カレッジと学部の一重構造を持っています。学部は国立であり、政府予算で運営されていますが、カレッジは独立採算の私立です。学生は、学部とカレッジの両方に所属することになります。

学部では、主として比較的大人数制の講義が行われ、学部は基本的には講義以外の機能を持ちません。学部もカレッジもそれぞれ独自の建物を所有しており、学部では、学部所属の教員が学部の建物で講義を行っています。

一方カレッジは、勉強・生活・礼拝の場であり、それぞれのカレッジは、図書館、礼拝堂、食堂そしてパブ等をもっています。伝統的に、カレッジが学業と生活の基盤となっており、カレッジの中で専門をこえた教官や学生と接することにより、研究や学習の幅が広がります。また、カレッジでの授業は、オックスフォードではテュートリアル、ケンブリッジではスーパービジョンとよばれる個人授業が中心です。このマンツーマンの密度の高い教育システムによって、教育や研究の高い水準が保たれています。入学試験もカレッジ毎に選考が行われ、カレッジの入試は、各カレッジが全く独自に企画・実行することができます。

4. オックスフォード大学

ボドリアン図書館:Bodleian Library

オックスフォードの地名の由来は、「牛の渡し場」です。テムズ川の中流域、ロンドンの北西約90kmに位置するオックスフォード大学は、30をこえるカレッジを有する総合大学です。

オックスフォードの大学図書館は100以上の図書館で構成されており、次の4つのカテゴリーに分けることができます。

- A. 中央図書館 (The Central libraries)
- B. 学部図書館 (Faculty libraries)
- C. 学科図書館 (Department libraries)
- D. カレッジ図書館 (College libraries)

そのほとんどは、2人あるいはそれ以下のスタッフによる学科図書館やカレッジ図書館です。学部図書館は、主に学部学生を対象としており、学科図書館より大規模です。カレッジ図書館の規模はさまざまですが、主にカレッジのメンバーを対象としています。

最も大きい図書館が中央図書館、そしてイギリス法定納本図書館でもあるボドリアン図書館



ラドクリフ・カメラ

です。ボドリアン図書館は、蔵書冊数633万冊、スタッフ335名、閲覧室29室という大規模図書室です(1998年1月現在)。オールドライブライリー、ラドクリフ図書館(ラドクリフ・カメラ)、ニューライブラリーと下記8つの分館で構成されています。

- A. Radcliffe Science Library
- B. Bodleian Law Library
- C. Rhodes House Library
- D. Indian Japanese Library
- E. Bodleian Japanese Library
- F. Philosophy Library
- G. Oriental Institute Library
- H. Hooke Library

この日案内していただいた Mr. Peter Warren 彼は数年前にボドリアン図書館を退職されたライブラリアンです。との待ち合わせ場所は、ニューライブラリーの前でした。ロンドンのパディントン駅から列車にゆられること約1時間半でオックスフォードに着きます。時間もなかったので、そこからタクシーで行くことにしました。素晴らしい風景がどんどん後ろに流れていきます。町全体が美術館であるかのような美しさです。半ば呆然としながら緑と調和した象牙色の建物に心を奪われているうち

に、タクシーが止まりました。

「ここがニューライブラリーです」。タクシーを降りたものの、どこにも「新しい」建物は見当たりません。待ち合わせの時間が刻々と過ぎてゆきます。あたりを見まわしていると、絵に描いたような英国紳士が目前の建物からでてこられ、声をかけて下さいました。案内役の Mr. Warren でした。どうやら私が道に迷っていないかと心配して外に出てきて下さったようなのです。どう見ても新しい建物を、先入観から認識できなかった自分にあきれると共に、思わず「ここがニューライブラリーですか。」と改めて問わずにはいられませんでした。

ニューライブラリーは、1940年に竣工されています。けれども、オックスフォードで最初の大学図書館が創設されたのが1320年頃、ポドリアン図書館が正式に公開されたのが、1602年であることを思えば、60年の歴史など、なるほど新しいものなのかもしれません。ポドリアン図書館の年譜を紐とくと、「1821年、暖房が導入される」「1928年、照明設備が導入される」など、その歴史を実感することができます。

なにはともあれお茶にしましょうと、案内された喫茶室にも、思わずため息がでてしまいました。14世紀初期に建てられ、コンポジションハウス（大学評議会議事室）に使われていた部屋が喫茶室として使われているのです。雅な曲線と壁の質感に、吸い込まれるようでした。

ラドクリフ・カメラは、八角形のドーム型の図書館で、英国初の円形図書館です。英国図書館新館を設計したウィルソン教授は、「アウラの漂う建物にはいくつかのタイプがある。…本来の機能を果たすことによって神聖さを帯びる建物のタイプもひとつある。偉大な図書館がそれだ。」と述べていますが、まさにそれを具現化したような建物です。ラドクリフ・カメラは、地下道でオールドライブラリーとつながっています。地下道に平行して、レールが敷かれており、資料は台車にのせて運ばれます。地下書庫には、可動式書架が使われていました。日本でよく見られるような、レールの上を動く書架ではなく、それぞれの書架の下に車輪がついている、全方向に移動可能な書架です。これで書庫スペースを有効に利用できると説明を受けましたが、地震が多い日本の図書館で書架がきちりと固定されているのとは対照的でした。閲覧室は静謐を極め、先人のさまざまな思惟が空気の中に漂い蓄積されているような気がしまし

た。

ところでこのポドリアン図書館は、イギリスにおける納本図書館のひとつです。日本の納本図書館は国立国会図書館一館のみですが、イギリスには納本図書館が6つ存在し、ポドリアン図書館の他に、英国図書館・ケンブリッジ大学図書館・スコットランド国立図書館・トリニティ・カレッジ図書館・ウェールズ国立図書館がその役目を担っています。伝統的大学の図書館は、過去の遺産をどのように保護し、後世に伝えていくかという課題をもちながら、一方で電子図書館という時代の波に洗われています。ポドリアン図書館も、後述の電子図書館プログラムeLibに参加しています。脚光をあびやすい電子図書館プロジェクトに参加しつつも、「場としての図書館」が、従来とかわらず大切にされているのです。

5. ロンドン大学:University of London

12世紀より数世紀にわたり、イングランドにはオックスフォード大学とケンブリッジ大学の二大学のみが存在していたわけですが、19世紀になり大学改革の必要性が叫ばれるようになりました。両大学は、上層階級と国教会のもので、非上層階級や非国教徒には全く門戸が開かれていないという閉鎖的な大学でした。「広く開かれた大学を」とドイツ諸大学の影響を受けた詩人トマス・カムベルが1824年にロンドン大学創立を提唱したのがその起源で、創設は1836年とされています。

イギリス最大のロンドン大学は、約50のカレッジおよび研究所で構成されています。今回の研修では、インペリアル・カレッジとパークベック・カレッジを見学することができました。

6. ロンドン大学インペリアル・カレッジ:

Imperial College of Science, Technology and Medicine

イギリス理工系三大学のひとつであるインペリアル・カレッジは、1907年に3つの大学が統合され、誕生しました。インペリアル・カレッジは、ロンドン大学の中で理工系の教育・研究を担っていますが、決して他に同じ分野のカレッジがないわけではなく、カレッジ同士の分野は互いにクロスしています。

アカデミック・スタッフ約2,600名、学生数9,000名という規模の大学です。一概には比較

できませんが、京都大学では、アカデミック・スタッフ約2,800名、学生数21,000名ですから、数的にアカデミック・スタッフがいかに充実しているかがよくわかります。



インペリアル・カレッジ中央図書館

また、1997年度のフルタイム学生は8,824名、パートタイム学生は894名でした。1年間で、フルタイム学生は18.9パーセント増、パートタイム学生は37.5パーセント増となっており、比較的パートタイム学生が少ないこのカレッジにおいても、特にパートタイム学生の増加が目立っています。

インペリアル・カレッジには中央図書館をはじめ、24の図書館があります。中央図書館は、近代的な白色が基調の図書館です。上層部はガラス張りになっており、採光が良く考えられた閲覧室が提供されています。閲覧机には、情報コンセントが設けられており、利用者は所有のコンピュータを持ちこんで利用することができます。また、中央図書館では、100以上のデータベースが提供されています。大学の構成員であれば誰でも、学内であればどこからでも、無料で好きなだけデータベースを利用することができます。この規模の大学でこれだけ多数のデータベースを提供できる鍵は、後述するデータセンター等の存在にあります。

また、印象的だったのが、他の大学図書館についてもいえることなのですが、「図書館員の顔」がみえる図書館であるということです。多くの図書館には、図書館員の顔写真と専門分野が掲示されていました。自分自身を利用者の立場においた場合、「図書館」という顔の見えない組織に質問するよりも、自分の求めていることにきちんと答えてくれそうな表情のある図書

館員へ質問する方が、安心感や親しみやすさを得られるのではないかと感じました。

7. 図書館ネットワーク

図書館ネットワークの発達、イギリスの大学図書館の特徴であるといえます。M25コンソーシアムをはじめ、多種の資源を共有するための図書館コンソーシアムが多数存在します。

また、電子図書館プロジェクトもその特徴を色濃く現しています。イギリスでは、1993年に高等教育機関における図書館や情報関連施設についての全国的調査が行われ、「フォレット・レポート」としてまとめられました。ここから電子図書館プログラム構想が生まれ、JISC: Joint Information Systems Committee がその設定と管理を行うことになり、イギリスにおける最大の電子図書館プログラムeLibが誕生しました。JISCとは、イギリスの高等教育機関における情報・図書館政策を決定し、予算を配分する機関です。初めに「電子ジャーナル」や「電子的ドキュメント・デリバリ」などのプログラム・エリアが決定され、それぞれのエリア毎に公募が行われました。その結果、約60のプロジェクトが生まれました。プロジェクトのほとんどは、複数の大学図書館が関与しており、ここに図書館ネットワークの思想がうかがえます。アメリカでは6大学を中心に、日本でも各大学レベルで図書館プロジェクトが進行しているのとは対照的です。

8. CHESTとナショナル・データセンター

イギリスには、JISCの助成を受けて、データベースやソフトウェアの契約を代行するCHESTという機関が存在します。CHESTは高等教育機関に代わって、データベース提供者と契約を結ぶ機関です。各高等教育機関は、直接データベース提供者と契約を結ぶのではなく、このCHESTと契約し、年間使用権を得ます。そして、データベース提供者は、データベースをデータセンターへ納入します。各高等教育機関は、必要なデータベースについて、まずCHESTと契約を結んでから、データセンターで管理されているデータベースを使用するという形になります。マンチェスター大学のMIMASやバース大学のBIDS、エディンバラ大学のEDINAなど、データセンターは複数存在

し、データベースは分散管理されています。例えば前述のインペリアル・カレッジで提供されているデータベースのうち、InspecやCompendexはEDINAを通して利用されています。

このデータベース契約代行機関であるCHESTとデータセンターの存在によって、3つの大きな恩恵がもたらされます。ひとつめは、一括契約及び契約業務の一元化によるコスト削減、ふたつめは、データセンターによる、人的・資源的リソース共有の実現です。そして、これがもっとも重要なのですが、データベース利用機会均等の向上です。高等教育機関の構成員であれば誰でも時間や料金を気にすることなくデータベースを利用することができます。データベース契約や管理に費やすコストが押さえられるため、所属大学による利用権の格差が押さえられるのも大きな利点です。

日本では、各大学が各データベース提供者とそれぞれ契約するという形を取ることが多いため、大学の規模や予算によって契約できるデータベースに格差が生じやすく、また身分によって、利用権に格差がみられるところもあります。イギリスでは、どの大学でも、学生が自由にデータベースを利用できる環境にあるのが印象的でした。

9. おわりに

それぞれの大学が背負う歴史によって、大学図書館は特徴づけられます。蔵書1冊1冊が鎖で書見台につながっていたことからわかるように、かつての大学図書館では資料の「保存」が中心でした。時代の流れとともに、資料の「提供」の重要度が増し、電子図書館時代を迎えた現在ではますますその傾向に拍車がかかっているように思われます。貴重な資料の保存を維持しつつ、最新技術を駆使して資料の提供に努めなければなりません。最も古いものを大切にしながら、最も新しいものに仕えなければならない。歴史が古ければ古いほど大きな宿命を背負うこととなります。けれどもまた、大学として新しければ新しいほどより時代の影響を受けやすく、それへの対応を迫られます。その解決策のひとつとして、人的・資源的リソースをあらゆる意味で共有できる図書館ネットワークがいかに大切かということ、海外派遣を通じて実感することができました。図書館ネットワ

ークとは、すなわち人的ネットワークでもあります。

「教育」が最優先政策である国の大学図書館員は、みんなきらきらした目をもっていました。「過渡期であるからおもしろい」彼らはそう言います。同じく変貌を遂げつつある日本の大学図書館にいる私も強くそう思います。

最後になりましたが、この海外研修を通じて、英国図書館のMr. Richard Roman に大変お世話になりました。またその縁で、今年5月に附属図書館でご講演頂くことが出来ました。各図書館でご案内頂きました図書館員の方々、このような素晴らしい機会を与えて下さったたくさんの方々に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

(どんかい さおり)

附属図書館利用統計（平成10年度）

利用対象者数

1. 学内教職員・学生数

28,568人

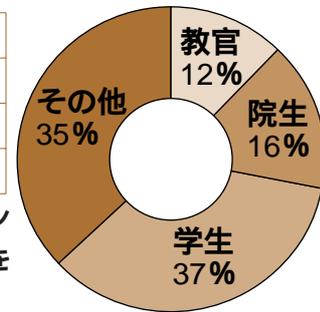
2. 登録者総数

36,056人（平成11年5月1日現在）

内訳

教 官	4,172人
院 生	5,601人
学 生	13,767人
その他	12,516人

その他には職員、卒業生、生協職員、スタッフ、フォード日本センター学生、放送大学生等を含む。



入館利用状況

年間入館者総数

744,834人

内訳

学 内	入館機	738,939
	マニュアル*	3,306
学 外	閲覧**	1,639
	見学	950

(人)

* マニュアル：忘れたり、紛失等による利用証不携帯の入館者

** 閲 覧：学外者の特別閲覧願手続きによる入館者と共通閲覧証による入館者

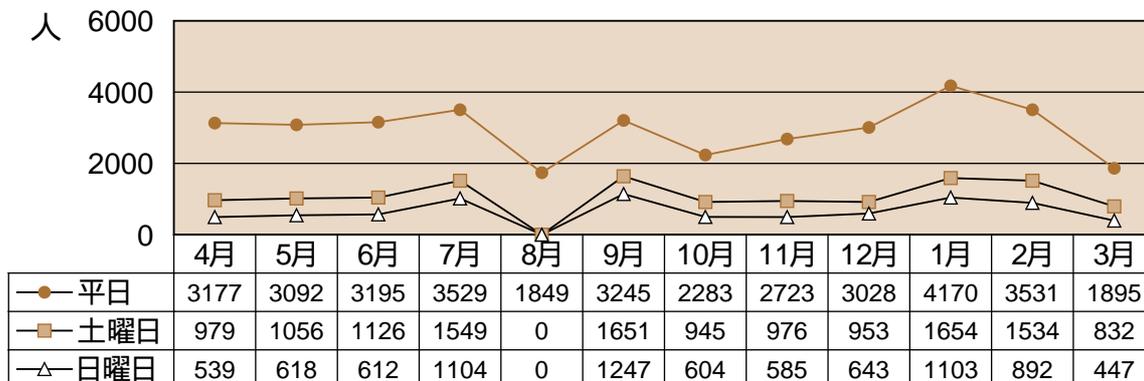
入館機による入館者 738,939人について

開館日 1日当たり	2,488
平日 1日当たり	3,140
土曜日 1日当たり	1,131
日曜日 1日当たり	753
1日当たり最多入館者数*	5,799

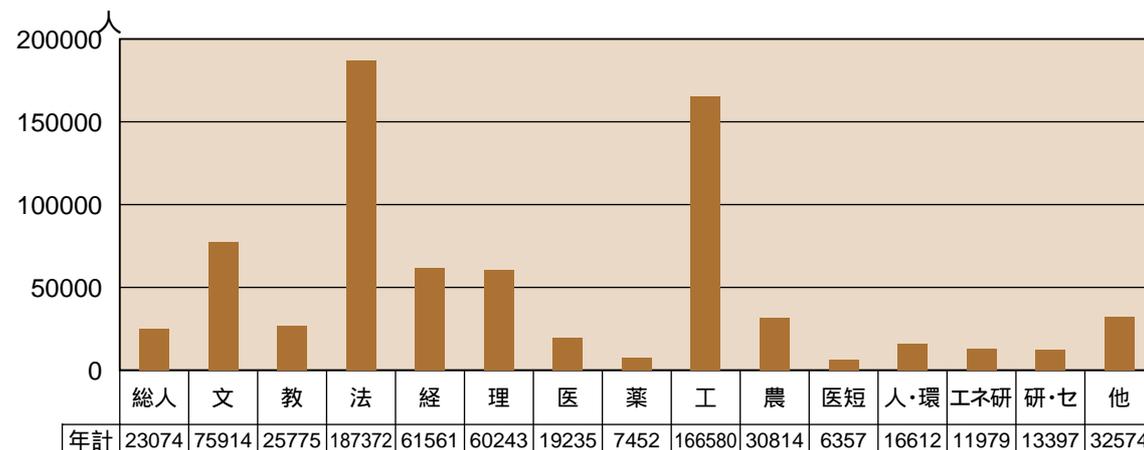
(人)

*平成11年1月18日

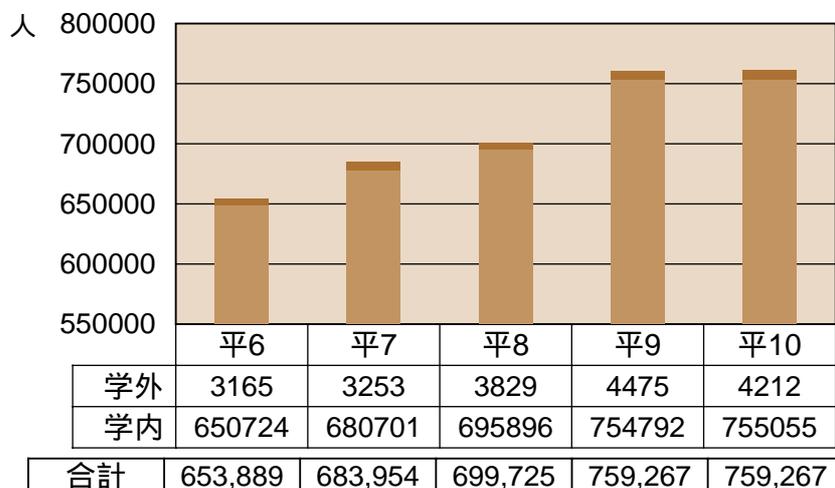
1日当たりの入館者数(入館機)



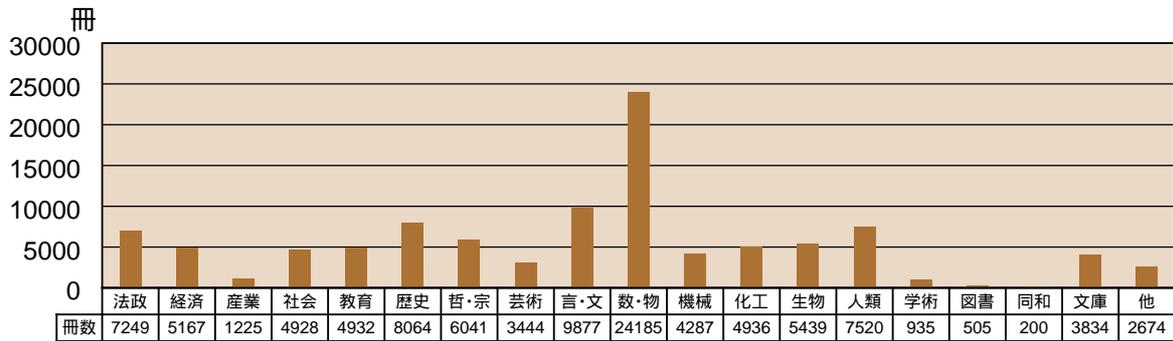
部局別入館者年計



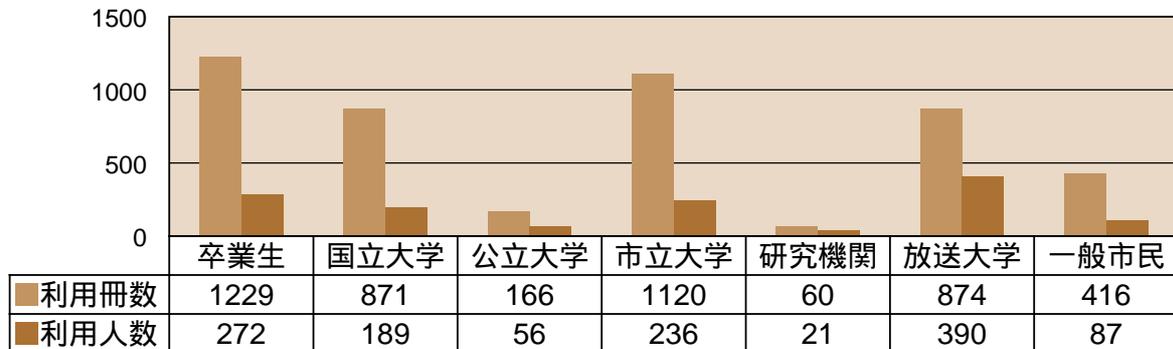
入館者数5年間推移



分類別貸出状況



学外者の利用



貴重書利用状況

貴重書(特殊文庫)閲覧上位リスト

1. 富士川文庫(明治以前和漢医書、幕末期西洋医学翻訳書 約9,000冊)	724冊
2. 河合文庫(朝鮮の文書・典籍 2,160冊)	384冊
3. 近衛家本(漢籍等 3,050冊)	277冊
4. 中井家(絵図・書類)	254冊
5. 陶庵文庫	174冊

貴重書掲載許可等

掲 載	61件	パネル作成	4件
翻 刻	11件	TV放映等	7件

無償貸与(展示会等)件数 7件(14点)

参考業務

文献調査

1. 受付件数

		平成10年度(件)	平成9年度(件)
内容	所蔵調査	9,851	13,761
	事項調査	434	333
	その他	3,381	1,919
	合計	13,666	16,013
形式	FAX(文書を含む)	3,148	4,318
	電話	4,611	6,943
	カウンター	5,907	4,752
	合計	13,666	16,013

2. 依頼件数

		平成10年度(件)	平成9年度(件)
内容	所蔵調査	115	226
	事項調査	4	21
	合計	119	247
形式	FAX(文書を含む)	119	235
	電話	0	12
	合計	119	247

3. 機関別受付・依頼件数(ただしFAX・文書に限る)

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
学内	68	
国立大学	624	65
公立大学	121	3
私立大学	1,602	37
国立共同利用機関	39	2
公共図書館等	120	0
非営利団体	17	3
一般企業	179	0
個人	374	0
国立国会図書館	4	9
合計	3,148	119

4. 学内者・学外者別利用件数

学内者	7,135	
学外者	6,531	
合計	13,666	(件)

相互利用

1. 他大学図書館訪問利用

	平成10年度(件)	平成9年度(件)
発行件数	1,555	1,311
受付件数	0	3,364

内訳

	発行	受付
共通閲覧証	485	
資料利用願	934	
特別利用願	136	

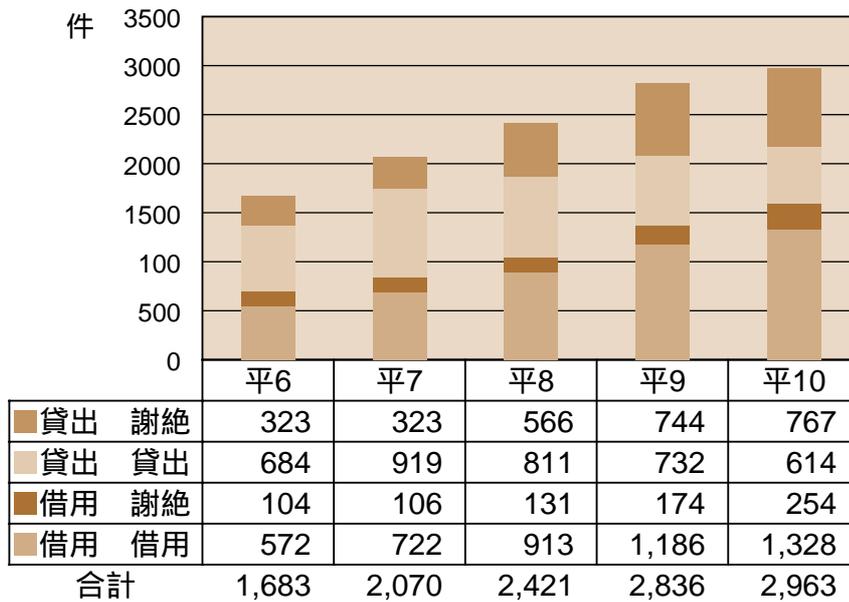
(件)

* 共通閲覧証：国立大学間共通閲覧証

* 特別利用願：国立大学附属図書館間夏季休暇中の特別利用願

2. 現物貸借

現物貸借5年間推移



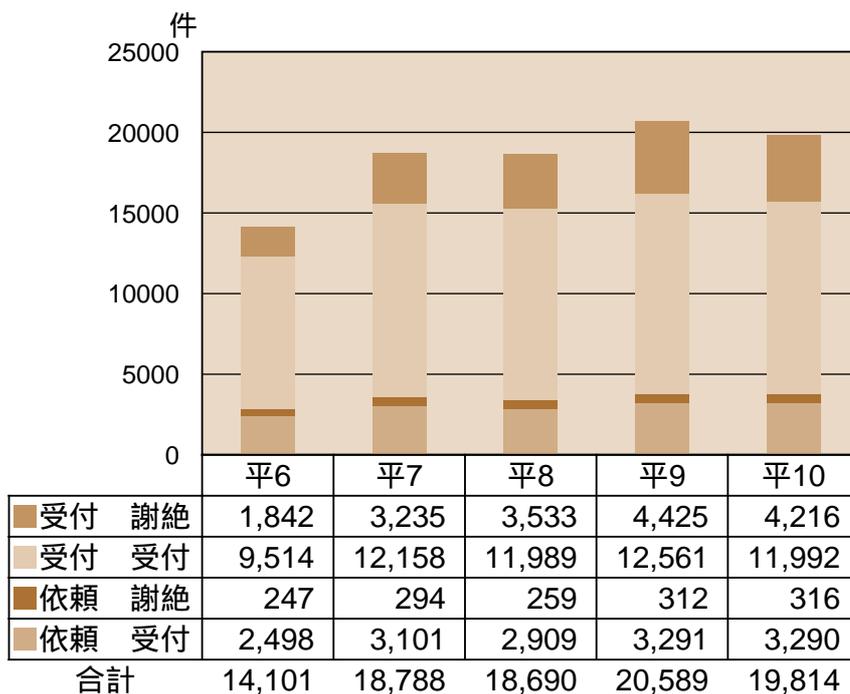
3. 文献複写

	平成10年度(件)	平成9年度(件)
依 頼	4,229	4,772
受 付	17,856	20,039
合 計	22,085	24,811

内訳

	国 外	国 内	学 内	合 計
依 頼	64	3,542	623	4,229
受 付	0	14,755	3,101	17,856
合 計	64	18,297	3,724	22,085 (件)

文献複写(国内)5年間推移



教官寄贈図書一覧 (平成11年4月～8月)

身分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	清水 茂	完訳水滸伝 5, 6	岩波文庫	1999
教授	小川 侃	Interkulturelle Philosophie und Phänomenologie in Japan	Iudicium	1998
総長	長尾 真	<地域間研究>の試み上	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	<総合的地域研究>を求めて	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾 真	小人口世界の人口誌	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	住空間史論	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	ブッシュマンの生活世界	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	幼児期の他者理解の発達	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾 真	身体運動における右と左	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	動物固体群の生態学	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	The Nation and Economic Growth	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾 真	Analytical Background of Geomechanical Phenomena	京都大学学術出版会	1998
総長	長尾 真	土地所有の政治史	風響社	1999
総長	長尾 真	労働・治安刑法論研究	学習院大学	1998
総長	長尾 真	「力強い指導者」になる46の伝言	かんき出版	1999
総長	長尾 真	霊長類学を学ぶ人のために	世界思想社	1999
総長	長尾 真	チンパンジーおもしろ観察記	紀伊国屋	1994
総長	長尾 真	グレートジャーニー 人類400万年の旅1 - 5	毎日新聞	1995
総長	長尾 真	Society, Economics and Politics in Pre-angkor CAMBODIA	東洋文庫	1998
総長	長尾 真	Black Holes and High Energy Astrophysics	UAP	1998
総長	長尾 真	Repertory of Dutch and Flemish Paintings in Italian Public Collections	Florence	1998
教授	狭間直樹	自立へ向かうアジア	中央公論新社	1999
名誉教授	梅本堯夫	子どもと音楽	東京大学出版会	1999
教授	中村良夫	研ぎすませ風景感覚 1・2	技報堂出版	1999
教授	加藤尚武	ヘーゲル全集 自然哲学 上・下	岩波書店	1998
非常勤講師	朱 捷	転法輪	ナカニシヤ出版	1999
名誉教授	鈴木昭一郎	Stendhal et le theatre	C.I.R.V.I.	1998
名誉教授	清水 茂	完訳水滸伝 7, 8	岩波文庫	1999

教官寄贈図書一覧（平成11年4月～8月）

身分	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
教授	渡辺弘之	Handbook of Agroforestry	AICAF JAPAN	1999
総長	長尾 真	宋史食貨志譯註(3)	(財)東洋文庫	1999
総長	長尾 真	榎一雄文庫目録 和文・漢文編、 欧文編	(財)東洋文庫	1999
非常勤講師	土居満寿美	コヌルコピアの精神	ありな書房	1999
教授	岡田篤正	Seismology and Earthquake Engineering in Japan	Property and Casualty Insurance Rating Organizatio	1998
総長	長尾 真	東京学芸大学50年史 通史編・資料編	東京学芸大学	1999
教授	横山俊夫	久米島における東アジア諸文化の 媒介事象に関する総合研究	京都大学人文科学 研究所	1999
総長	長尾 真	日本語音声の研究 6, 7	和泉書院	1998・1999
総長	長尾 真	奈良国立文化財研究所史料 第47冊	奈良国立文化財 研究所	1998
総長	長尾 真	方言文法全国地図 4	国立国語研究所	1999
教授	小林四郎	Star and Hyperbranched Polymers	Marcel Dekker Inc.	1999
名誉教授	倉知三夫	Advances in the Prevention of Environmental Cadmium Pollution and Countermeasures	Eiko Laboratory	1999
総長	長尾 真	東洋文庫蔵 越南本書	(財)東洋文庫	1999
総長	長尾 真	宋史食貨志譯註(2)	(財)東洋文庫	1999
総長	長尾 真	認知情報処理における文脈効果と 自動的処理認識的処理	風間書房	1999
総長	長尾 真	カワムツの夏	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾 真	サルのことば	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾 真	クセノポン ギリシア史	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾 真	視聴覚情報の基礎理論	コロナ社	1999
総長	長尾 真	確率概論	京都大学学術出版会	1999
総長	長尾 真	複雑系を超えて	筑摩書房	1999
総長	長尾 真	DAEDALUS	The American Acadey of Art and Sciences	1999
総長	長尾 真	Art of our time 高松宮殿下記念世界文化賞の10年	(財)日本美術協会	1999
名誉教授	清水 茂	完訳 水滸伝 9・10	岩波文庫	1999
教授	淀井淳二	Redox Regulation of Cell Signaling and Its Clinical Application	Marcel Dekker Inc.	1999
教授	川崎良孝	大学生と図書館	日本図書館研究会	1997

とぎぞうし
お伽草子 物語の玉手箱

京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会

開催期間 平成11年11月24日(水)~12月7日(火)
開催時間 午前10時~午後5時(入場は4時半まで)
会場 京都大学附属図書館3階展示ホール 入場無料



『たま藪のまへ』巻二より

記念講演会 弁慶像の展開 御伽草子『弁慶物語』

講師 池田敬子氏(京都府立大学教授)
日時 平成11年11月29日(月)午後1時半~3時
会場 附属図書館3階AVホール

お問い合わせ：京都市左京区吉田本町 075-753-2626

C O N T E N T S

日用百科の使われかた：小口の手沢相は語る	1
附属図書館100周年：『『静情』総目次』を読む	3
イギリスの図書館ネットワーク：英国図書館・イギリスの大学図書館訪問記(2)	6
宇治地区五研究所共通図書室の経過：シリーズ「京都大学図書室巡り」	11
図書館の動き	11
附属図書館利用統計(平成10年度)	12
教官寄贈図書一覧	18

編集後記

附属図書館創立100周年記念事業の一つとして、外部評価を受けることになりました。評価のための参考資料である「利用者アンケート」の中に、「学内のどの図書室にどんな特徴的な資料が見られるのかがわかりにくい」という意見がありました。おおいに、『静情』の誌面を資料案内で埋め尽くさなくてはと思っています。(G)

京都大学附属図書館報「静情」Vol.36 No.2 (通巻132号) 1999年10月31日発行 編集：静情編集委員会
(責任者：附属図書館事務部長) 発行：京都大学附属図書館 京都市左京区吉田本町 Tel.075-753-2613